慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 構造的暴力と社会的行為としての悪の関係性 |
| Sub Title | |
| Author | 中村, 雄輝 |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2017 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.84 (2017. ) ,p.53- 55 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 平成29年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000084-0053 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 平成29年度
# 博士課程学生研究支援プログラム
# 研究成果報告

## 構造的暴力と社会的行為としての悪の関係性

中村雄輝

### 1. 研究の概要

本研究の目的は，社会的行為としての悪と構造的暴力の関係性を探究することで，責任の所在が特定可能となる新たな行為論を提出することである。近代社会においては，組織構造や方法によって加害者が特定されずに暴力を振るうことが可能である。戦争，虐殺や金融政策までもが，数万の人の命に影響を及ぼしている。しかし，暴力は複雑な社会的状況下で行われているため，誰がどう責任を負うべきかを的確に示すのが非常に困難である。本研究では「悪」を一個人が他人を傷つける社会的行為として扱うことで，社会学における行為論を応用し，構造的暴力と一個人の行為との関係性を理論的に分析することを試ている。

他者を傷つける社会的行為は，個人のレベル以外に，集団または組織レベルでも行われる。したがって本研究では，行為主体としての集団における，個人の位置付けを解明した上で，行為主体によって悪の形態がどのように変化するかを検討した。つまり，社会的行為としての悪を個人と集団との関係性を考慮したうえで理解し，最終的に誰が責任を負うべきなのかという問題の明確化を試みた。しかし，加害者が特定出来る社会的行為としての悪に対し，社会構造的なアプローチから行われる構造的暴力は加害者が特定できないため，分析対象が個人から集団や組織に拡大されたとき，責任の所在を明らかにすることが非常に困難である。そのため，ヨハン・ガルトゥング（1969）が展開した平和理論および構造的暴力の概念と，一個人が行う社会的行為としての悪との関係性を社会理論的に検討した。その結果，他者を傷つける行為を行う行為主体が個人，集団ないし組織であるかによって，加害者，被害者，傍観者の間に異なる社会過程が生じる上に，悪の形態が変化し，責任の分散・消散が起きることが明らかになった。

### 2. 研究成果

従来の社会学では悪を社会や組織のもつ病理として捉えることで，悪は常に道徳的価値観や集団的規範の不在（Alexander, 2003; Pickering and Rosati, 2008），社会構造による産出や他者による社会認識として扱われてきた（e.g. Bauman, 1989）。要するに，悪という社会的行為は個人のエイジェンシーを超えた力の結果という事になる。すなわち，近代の産物として，個人の意思や意図を超えた組織，官僚制や社会構造などが原因であると説明されてきた。ゆえに，従来の暴力・悪研究では，社会構造による効果として暴力を検討するアプローチ（e.g. Milgram, 2009 and Bauman, 1989）と個人の意図を強調するアプローチ（e.g. Goldhagen, 1997 and Katz, 1988）の分裂が見られた（Geddes, 2003）。しかしこの認

識は不完全であり，誤解を招くのである。悪とは犯されなければならない社会的行為である。悪とは他者の意思に反して意図的に被害をあたえる行為を意味する。なおかつ，社会現象としての悪を理解するには一個人の行為を構造的暴力の枠組みで検討する必要があり，社会的行為としての悪と構造的暴力の関係性を理論的に検討することで責任の所在の問題の解明につながると著者は考えている。

ヨハン・ガルトゥング（1969）が展開した暴力の定義は「可能性と現実とのあいだの，つまり実現可能であったものと現実に生じた結果との間のギャップを生じさせた原因」である。すなわち，暴力とは可能性の阻害である。加えて，構造的暴力の特徴としては加害者が特定できない点である一方，著者は悪を社会的行為として定義づけているため，一個人の行為を扱う概念である。

著者は，この「暴力」の概念的分裂は，構造的な側面と個人的な側面をより的確に表していると考えている。ガルトゥングは，それぞれを加害者が特定できない構造的暴力に対し，個人が行う個人的または直接的暴力（personal violence and direct violence）と名付けている。ガルトゥングによれば，個人的暴力の概念は，個人のエイジェンシーに伴う意図せざる結果や無意識のうちに他人を傷つけてしまう行為を考慮していない。その結果，暴力の「個人的な側面」を説明し，かつ暴力における社会構造と個人の関係性を探究が不十分になると議論した。

新たな暴力理論の展開に向けて，一個人の行為に伴う意図せざる結果を考慮するために，著者はアンソニー・ギデンズ（1979, 1984）の構造化論を用いた。そして，無意識的に行われる悪を説明するために，ジョン・キークス（1997）が展開した非自律的悪の概念を応用した。構造的暴力と社会的行為としての悪の理論的な対立と関係性はある意味，社会学理論における社会構造とエイジェンシーのジレンマの現れでもある。その結果，構造化論や非自律的悪，つまり行為論的観点から構造的暴力と社会的行為としての悪の関係性を検討する必要があった。さらに，集合体などにおいては，一人ひとりの意思や意図とは無関係に，結果的に行われる害のことを社会的悪（social evil）として認識している。社会的悪は合理的選択理論がベースであるため，直接的にではないが，著者が展開している暴力・悪の行為論はそういった研究にも関係している。

結果として，暴力の個人的側面と構造的側面の理論的考察を行うことで，責任の所在が以下の3つのメカニズムによって分散することが明らかになった。

1. 一個人の意図と意思とは無関係に生じる社会的悪
2. 被害者の存在を匿い，加害者の作業を分業化する巨大組織の構造
3. 加害者，被害者と傍観者の距離を遠ざける技術的要因

社会学理論における悪と構造的暴力の先行研究の精査を行うことで，今後の研究を進めるにあたっての手がかりを得ることができた。

## 3.　今後の課題

以上の議論で，悪を社会的行為として扱うことで構造的暴力における加害者の導入を試みたのに加え，責任の所在がどのように分散するのかを明らかにした。しかし，必然的に次の問題が生る。カード（2006）が論じるように，大規模な残虐行為に関与している者は多くは加害者であると同時に被害者でもある場合がある。同じように，傍観者の立場であること自体が結果的に被害者の被害を拡大することもある。構造化論や非自律的悪の概念の用いることで，理論的に構造的暴力と悪の関係性を探究できるが，同時に行為主体を分類し，当事者間の線引きも行う必要が生じる。

つまり，エイジェンシー理論を用いて，一個人の行動する能力や行為に伴う意図せざる結果を分析に含めることによって，加害者・被害者の定義が曖昧になる危険性が出てくる。よって，今後は今までの研究成果を踏まえエイジェントの分類と残虐行為の当事者の定義づけについてさらに検討していきたいと考えている。

## 4. 関連業績

Nakamura, Yuki. "The Relationship between Perpetrator, Victim and Bystander". The Asian Conference on the Social Sciences 2017. 神戸市，日本。2017年6月11日発表。（査読あり）

### 参考文献


Alexander, Jeffrey C. *The Meanings of Social Life: A Cultural Sociology*. Oxford: Oxford UP, 2003.*The Dark Side of Modernity*. Cambridge, UK: Polity, 2013.

Bauman, Zygmunt. *Modernity and the Holocaust*. Cambridge: Polity, 1989.

Card, Claudia. *The Atrocity Paradigm: A Theory of Evil*. Oxford: Oxford U, 2006.

Galtung, Johan. "Violence, Peace and Peace Research", Journal of Peace Research, Vol. 6, No. 3, pp. 167–191. 1969.

Geddes, Jennifer L. "Banal Evil and Useless Knowledge: Hannah Arendt and Charlotte Delbo on Evil after the Holocaust". *Hypatia*, Feminist Philosophy and the Problem of Evil. Vol. 18, No. 1: pp. 104–115. Wiley, 2003.

Giddens, Anthony. *Central Problems in Social Theory: Action, Structure and Contradiction in Social Analysis*. London: Macmillan, 1979.

————. *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*. Berkeley: U of California, 1984.

Goldhagen, Daniel Jonah. *Hitler's Willing Executioners: Ordinary Germans and the Holocaust*. New York: Vintage, 1997.

Katz, Jack. *Seductions of Crime: Moral and Sensual Attractions in Doing Evil*. New York: Basic, 1988.

Kekes, John. *Against Liberalism*. Ithaca: Cornell UP, 1997.

Milgram, Stanley. *Obedience to Authority: An Experimental View*. New York: Perennial, 2009.

Pickering, W. S. F., and Massimo Rosati. *Suffering and Evil: The Durkheimian Legacy*. New York, NY: Berghahn, 2008.

Rigby, Andrew. *Justice and Reconciliation: After the Violence*. N.p.: Lynne Rienner, 2001.